

ハンマー10話

第9話 蟒（マムシ）の話

株復建技術コンサルタント 吉川謙造

奄美諸島に棲むハブを除けば、本土に生息する毒蛇はマムシだけである。（最近はヤマカガシの毒もみつかっている）

岩手県のT鉱山に「マムシの辰さん」という人が居た。

背中に刺青でもした、こわい人を想像していたら、案に相異して小柄で人の良さそうなオジさんであった。

この名前は、辰さんがマムシにかまれて、丸太棒のように腕がはれあがって、九死に一生を得た時につけられたあだ名が、そのまま定着したもので、全然こわくないのが当然だと納得した。

又、学生時代のマージャン仲間で、「チョンボの○○さん」と呼ばれている人が居た。名前の由来は、その人が大変にマージャンが上手で相手のチョンボを一目で発見してしまうので、敬意を表してつけられたものであったが、本人は返上したくて困って居られた。

ニックネームが上手く人の特徴をあらわしている事も多いが、こんな例もしばしばあるから面白い。

世の中には蛇のきらいな人が結構居る。中には自動車に乗っていて、はるか遠くの道端に長い物を見付けても体がすくんでしまうような人が居たり、草むらで縄や棒きれを見ても飛び上る人が居たりする。

私はそれほど蛇がきらいではないが、マムシのそばを平気で通れるほどではない。

広島県内のある所で、マムシとにらめっこした事がある。こちらは3人、先方は1匹で、とぐろを巻いてこちらをにらんでいる。

いつまでにらめっこしていても、らちがあかないで、このマムシをつかまえてやろうということになり、手頃な木の枝をさがそうと3人がほん

の一瞬（おそらく2～3秒）だったろう）目を離した。

そのわずかな隙にマムシは跡形もなく姿を消してしまった。魔性ともいべき、おそろしい素早さで、あたりの草むらはカサリとも動かなかった。

さあ今度はこちらが気味悪くて、うかつに動けない。どこか近くに潜んでいて、急にうしろから飛びかかるのではないかと心配で心配で、ようやくそこを走るようにして通り抜けたのであった。

人類には蛇のきらいな人と、蛇はそれほどではないが、どちらかと言うと毛虫の方がきらいな人と2系統があるという。

もっとも、両方共きらいだったり、あるいはこわくも何ともない、といった人も稀には居るが、これは宇宙人の子孫ではないかといわれている位で、誰でもどちらかの系統に属するはずである。

それは、人類の発生起源までさかのぼることになるらしいが、一方は蟄居（ちっきょ）＝（穴ぐらの生活）でスタートした人で、蛇とは仲間のようなもので、ちっとも恐くない人達であると言われており、もう一方は南方系の樹上生活者で、こちらの方は、毛虫とは親せき関係にあるらしい。

以前にキノコの話で書いた、九州の猟師Iさんは、マムシ取りの名人でもあった。一緒に歩いていて、一日に2匹も3匹もつかまえるのである。目ざとく見付ると、伐採用の鎌の背で抜く手も見せずポンと頭を一打ち。まだのたうちまわっているやつを、背中のリュックに放り込む。生き返ってリュックからはい出して、背中や首筋でもかまれたら大変だと思うのが素人で、ちゃんと急所は押えているらしい。

もちろん私は、マムシをとる勇気も技術も持ちあわせていないから、コワゴワ後からついて行く

だけであった。

そんな私もたった一度だけマムシをつかまえたことがあった。

冬の12月に鹿児島県内の踏査をしていた時である。ポカポカと暖かい日で、昼の弁当を食べてから切倒した材木の上で昼寝ができるほどであった。

ふと目をさまして枕元を見ると、マムシが一匹、やはり材木の上で昼寝をしていた。私が先客で、あちらはノコノコと後からやって来たに違いない。こちらの頭から数十センチの至近距離である。三角形をした頭の形といい、背中の錢型模様といい、まぎれもないマムシであった。

逃げようか、やっつけようか、一瞬迷った末、あちらも寝ているらしいのをいいことに、初のマムシ取りに挑戦することに決めた。

調査鞄からとり出した厚手の革手袋とハンマーで完全武装し、いつでも逃げられるように足元を確かめてから、頭に向けてハンマーを打ちおろした。

日頃の訓練のたまものか、ハンマーはねらいがわざ、マムシの頭を碎いた。

とどめをさしてから、ビニールのサンプル袋に入れて持ち帰ったが、いつはい出して来て、仕返しをされるかと、宿につくまでこわくてしようがなかった。

宿で武勇伝を話して、女中さんに獲物を見せたら、少しもおどろかず、良かったらいただきますと言って、ぶら下げて持って行ってしまった。こちらとしては少々拍子抜けの思いであった。

その後このマムシがどのような運命をたどったのか知らないが、この女中さんはマムシの必要などいささかも感じられないほど、立派な体格をしていたのを覚えている。

人から聞いた話だが、マムシ酒と、マムシご飯の作り方を紹介させていただこう。

マムシ酒を作るには、生きたままのマムシをつかまえなければならない。

おそろしさの故に打ち殺してしまったヤツは、皮をむいて串焼きにする位しかないので価格が下がるということである。

先ず、一升瓶などに真水を入れておいて、の中につかまえたマムシを入れる。頭の方から押し込むのだが、中で半転してすぐ頭を出そうとするので、素早く水の枝等で栓をする。

しばらくは、水の中で暴れまわっているが、その内に弱っておとなしくなり、胃袋の中の異物をすっかりはき出してしまう。

こうしてきれいになったマムシを今度は焼酎に漬けるのである。一升瓶なら蛇はとり出せないので、水だけ捨て代りに焼酎を入れれば良い。

少々濁ったマムシ酒で良いなら、最初から酒に漬け込んでもかまわない。カエルやミミズのエキスが入って、これもうまいかも知れない。

マムシの毒は噛まれて血液中に入ると大変だが、酒に混じると効き目はぐんと上る。

だからプロは予め、毒を別の容器に吐かせておいて後で混ぜたりして強力なマムシ酒を作るということである。

しばらくしてマムシが溶けはじめたらOK。あとは毎日少しづつ（盃に一杯）たしなめば良い。

次はマムシご飯である。できれば数匹のマムシを用意した。

ご飯を鍋か釜で炊きあげる。もうすぐ出来あがるという所で蓋をとって、今度はやや小さ目の蓋で数ヶ所に穴のあいたものを用意し、マムシを素早く放り込んでこの蓋をする。

マムシは暑くて苦しがり、脱出を図って、穴からようやく首を出したところで、あわれ息絶える。

ほど良く蒸しあげたら、頭を指でつまんで引っぱると、頭と骨だけがスッと抜けて来て、身は炊きあがったご飯と一緒に残るといったあんばいである。

これが、ウナギの蒲焼以上に美味しいという話である。

数匹のマムシが入ったご飯なら、おそらく十人以上で食べても十分余る量があるにちがいない。

但し、私は残念ながらこのマムシご飯だけは食べた事がない、又、実際に作っている所も見ていないわけではない。

本当に首だけ出してマムシが息絶えるか、又、頭を引っ張って、うまく、骨が抜けてくれるのかどうか保証の限りではない。



第10話 地質屋としての出発

私は、今はいっぽしの地質屋のような顔をして、又、世間様からもそのような目で見ていただいているが、実は、ニワカ仕立てのニセ地質屋なのである。

地質・鉱物には以前から少しばかり興味を持っていて、鉱山会社に入って地質・鉱床探査の仕事をやりたかったのだが、コースの選択を間違えて、鉱山（採鉱）屋の道へ進んでしまった。

卒業に際して大手の鉱山会社の入社試験を受けたけれども、工学部出身では探査（地質）屋としては採用してもらえたなかった。面接試験で採鉱か、選鉱ならと推められたが、イヤだとことわってしまったので見事に不採用となった。

そんな事でモタモタしているうちに、どこにも就職できなくなりそうになり、あわてて、中規模の鉱山会社にもぐり込む羽目となつたが、採用条件はやはり採鉱屋ということであった。

しかし、幸か不幸か、入社後にはじめて配属された鉱山は、昭和40年当時、大富鉱体に当つて大もうけをした時代であり、しかも、所長が同じ学校の先輩ということもあって、新入社員の一人や二人、少々勝手なことをいっても大目に見てもらえるような状態にあった。

同期入社のみんなと一緒に事業所概要の一通りの説明を受けた後で、3ヶ月の実習をどこでやりたいかと聞かれ、私は探査課を希望した。

採鉱屋になるにしても、探査の知識は必要だろうということで、何とかお許しをいただき、地表踏査や、坑内スケッチなどの基本訓練を受けさせてもらったことが、今にして思えば大変役に立っている。

3ヶ月の実習が終った後も、この所長の特別のはからいで、1年間だけという条件で探査課に居ても良いという許可をもらい、とにかく夢中で毎日のように坑内に通い、一年があつという間に過

ぎてしまった。

約束の一年が丁度終った時、私の運命を決定する大事件が待っていたのである。

その当時は今のように円高で鉱山業界が不況ということではなく、むしろ、石炭の斜陽化に比して、金属鉱山は秋田の黒鉱々床発見ブームに象徴されるように開発ブームに湧いているような時期でもあった。

そこで通産省が音頭をとって、広域調査なる事業がスタートしていた。これは、鉱産物等の貿易自由化をむかえて、鉱産物の自給率を高めるべく、我が国でも所外に負けないような大規模・良質の鉱床を発見しようということで鉱山会社が各自の手持ちの鉱区を越えて、それぞれ調査員を出し合い、大学の教授や、地質調査所のベテラン研究員などが班長となって、広く有望な地域全般の地質を調べて、探査の網をしづらつと広げ、未だ発見されていない有望鉱床を探そうという、行政指導の最たるものともいべき、国家指導型の画期的かつ遠大な企画であった。

その調査員である班員に、私の勤務している鉱山の先輩地質技師が国から指名されたのである。

班員の年齢と技術レベルは大体大卒10年位の地質調査経験者ということで、この先輩はまさに条件にピッタリであった。

ところがこの先輩は、地質調査では大変な実力の持ち主である反面、少々我儘なところがあって「天皇陛下」というあだ名をたてまつられていた。この人がヘソを曲げたら、先輩、上司は言うに及ばず、所長でも言う事を聞かないという大変な人なのであった。

一時、会社の探査課の事務所をカーテンで仕切った個室に一人閉じこもり、その中で勉強に専念しておられた。（日常業務の話し声や、計算機の音がうるさくて自分のための勉強ができないという

のが言い分であった)

その個室を見て、やってきた人はみんなびっくりして、中には誰が居るのかと聞くけれども、名前を聞くとみんな納得するのか、あきれてしまうのか、誰一人文句を言わなかったのをおぼえているが、新入社員の私の目にも奇異に映ったのは事実である。

のことから推測すると、その人の実力が大変なモノだったのか、あるいは、実力が大変なモノだったのか、あるいは、この程度の個人の我儘なら大目に見て居られる位に、その鉱山がもうかっていたのかどっちかだったのだろう。

幸か不幸から、当時の探査課には私とその先輩の間には一人も地質屋には居なかった。実は、私とその方の間には数人の地質屋が入社してはいたのだが、みんなこの先輩からイビられて会社をやめて行ったというのだから、イヤハヤ大変な人物であることに間違いなかった。

広域調査の調査地域に指定されたのは大分と宮崎の両県にまたがる、九州中央部の1,500m級の山岳地帯として知られる祖母（そぼ）、傾山（かたむきやま）地区であった。

天孫降臨の地として名高い、高千穂峠や、天の岩戸にも近く、山深くに平家の落人部落が散在するといった所で、神話と伝説のふるさととして観光で訪れるには魅力たっぷりの土地ではあるが、地形の急峻さと気候のきびしさに加えて、生活の不便さは大変な所である。当然のことながら先輩はそんな所へは絶対に行かないと駄々をこねた。

誰も説得できなかったことは言うまでもない。みんなが氣の毒そうな、そして心配そうな顔付で私の方を見た。

これですべて決定である。

さあ、翌日からニワカ地質屋としての私の特訓がはじまった。連日、その地方に産する何百という岩石や、鉱物の標本とのニラメッコ。関係のありそうな報告書などは、目の前に山と積まれた。又、かつてその鉱山に勤務したことのある人から、その地方の山にはゴマンと居るマムシやヒル、ア

ブの話しゃや、九州人の氣質等々次々と聞かされるのである。出発までの二週間はまたたく間に過ぎた。試験の一晩潰けだってもう少しほはシだつたと思う。

岩手県三陸の片田舎から、汽車を乗り継いで、大分県の山の中の鉱山まで、道中は特に長く感じられた。

はたして自分は無事にこの役目をつとめられるだろうか。大きな恥をかいて、みんなに迷惑をかけたりはしないだろうか、等々…。気の滅入ることばかりであった。

指定された宿に投宿すると、果せるかな、勢ぞろいした十数人の班員は、私を除いて、みんな一目でそれと判るベテランぞろいであった。

私は年齢も1才ばかり上の方にサバを読んで、それでもそれがバレはしないかとビクビクしながら、みんなの陰で目立たないように、打合せの説明を聞くのが精一杯だった。

みんながそれぞれ受持の範囲を決められて、短い人でも3ヶ月、長い人は6ヶ月に及ぶ調査に入ったが、それからが又一苦勞であった。今度はたった一人で未知の領域へ飛び込むのである。土地の地理にくわしい獵師を案内人におねがいしていたが、こと地質に関しては、私の足と、目と乏しい知識だけが唯一の頼りとなるのだ。

今まで一人で地質調査で歩いたことがないばかりか、古生代の地層を実は何一つ知らなかつたのだから、毎日のフィールドが新しい発見と勉強そのものである。先ず手はじめは、ずっと昔の人にによって作られていた、あやしげな地質図をわずかな頼りに、夜中にこっそり現地や出向き、懐中電灯を頼りにここぞと思う露頭から、代表的な岩石を採取して来て、人知れずこれがスレート（粘板岩）、これが砂岩、これが石灰岩、そしてこれがチャートといった具合に一つ一つ頭にたたきこんで行った。

たまに合同打合せということで、班長や、他の班員と一緒に集つた時も、大切な勉強の場であった。他人同志の話しを脇で聞いていて、判らない

語句が出て来たら、素早く手帳に書きとめておいて、その夜のうちに鉱物辞典を引いておぼえ、翌日はもう前から知っていたような顔で使ったりもした。

幸いにも古生層の地質は境界も明瞭なので、そんなにむずかしい岩石も沢山は出てこなかったから、一週間も立てば何とかそいら辺に出てくる石の名前には困らなくなつた。

それから半年間というものは、天気の悪い日を除いて、ほとんど毎日、休むことなく、山を歩き続けた。

道のまったくない所を伐採しながら踏査して、リュック一杯のサンプルをかついで歩くと、1日に数キロの踏破が精一杯で、宿に帰って一風呂浴びしてから、その日のルートマップに墨入れ着色して仕上げ、もう一枚の白図に控を写し入れるといった作業はすこぶるハードなものであった。最初の10日間位は、ものすごく疲れて、朝起き上るのにも体が伸びいうことをきかず、昼間は昼間の滝のような汗をかいて、一日に1.8ℓ入りの水筒1本を軽く空にした。何でこんなに苦労しなければならないのかと、残された、未踏査の広大な地域を思い、足のすぐむような崖をよじ登ったり、1m先もみえないようなヤブをこぎながら、考えたことも度々であった。夏が過ぎて秋になった。皮の登山靴を3足はきつぶして、ハンマーも数本とりかえたが、いつの間にか、体は軽くなり、どんな危険な斜面でも易々と歩けるようになつた。

以前は案内人のあとから、あごを出しながら、ついて歩くのが精一杯だったが、今や案内人がはるか後からついて来るのを待つゆとりさえ持つようになった。そして何よりも、自信がついたことは、自分がこの目で見た所の地質は、誰よりも自分が一番良く判っているということを知ったことだ。

どんなにエラい先生が作られた地質図でも、歩かないで推定した所は、素人の私であってもちゃんと見て書いたモノには絶対に勝てないということが判ったことである。こちらも若さにまかせて、色々と新しい事実を発見して得意になつたり、又、突飛な質問をして、先生方を困らせたりもしたが、

とにかく、足でかせいで、少しづつ地質図らしきものを作りあげて行った。

調査が終って、班長をつとめられた先生と、事務局の方から、私の作ったルートマップが一番くわしく精度も高かったと伺った時は大変にうれしかつた。

この時期は、丁度乾いた海綿が水を吸い込むように、新しいことをどんどんおぼえていった時でもあったようだ。調査が終りに近づく頃には、なんとか他の班員に混つていっしの地質屋といった顔で話すことができるようになつた。

指導していただいた、愛媛大や、九州大、そして長崎大などの先生方も、大変に気さくな方ばかりで、私ごとき、にわか仕立ての地質屋でも、少しもバカにされず、懇切丁寧に教えて下さり、どんな的外れの質問にも適切なお答えをしていたことも大変有難かった。

その後、この出会いが御縁となって、これらの先生方からは、未知のフィールドにもどんどん引きまわしていただくことになるのであるが、この経験は、私の地質屋としての出発点として、一生涯忘れることのできないものであった。

どんなむづかしいフィールドでも、又初めて行った所で、大した予備知識を持っていなくても、真剣な態度で、現場の露頭をじっくりと観察することから出発すれば、必ず、それなりの成果と結論が出るものであり、この成果は又、誰にも負けないものとなるということを実感として体験できたことが、大げざに言えばそれからの私の人生観を大きく変えてくれたようである。

私は未だ正統的な鉱物学や、古生物学を学んでおらず、又、深く勉強もして居ないので、これらの分野の知識は、はなはだ貧弱で、とても世間では通用するものではないことを良く知っている。

しかし、学問の道は広く、深く、何事によらず自らが真剣に学んでいるならば、世界的な大権威といわれるような先生の前に出ても、いたずらに恐れ入って、卑屈になる必要はないと胸を張って生きられるのが幸せである。

今では先輩の天皇陛下氏に心から感謝している。

完